



Title	森塚文雄教授退官記念特集号に寄せて
Author(s)	金山, 崇
Citation	大阪外大英米研究. 1985, 14, p. 7-8
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/99078
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

森塚文雄教授退官記念特集号に寄せて

金 山 崇

とうとう森塚先生がお辞めになる日を迎えることになってしまった。今年二月二十日、満六十五歳を迎えられたことで、規定による定年退官という如何ともし難い事実があり、又御退官後も、ある新設大学の英語科の創設並びに運営という重責を負われることが既に決まっているといった客観的情勢の下で、われわれは涙をのんで先生とお別れしなければならない。三年前には、それまで学科主任であられた林栄一教授が本学の学長に選出されて、語学科としてまことに大きな痛手を蒙っただけに、今又、森塚先生をお送りする寂しさは一入のものがある。

森塚先生が二十年間勤められた神戸商科大学教授の職を辞され、懇望されて本学へお越し下さったのは昭和四十四年の春、大学紛争の余燼まださめやらぬ頃であった。入試の採点も上本町の校舎が利用できず、たしか市内の天満橋あたりのホテルを借りて行っていたと記憶している。大学院の英語学関係の要員を強化すべくお迎えしたのであった。先生は、日本の英語学界の重鎮のおひとりであった故大塚高信博士の主宰される大阪英語学研究会のメンバーであり、そこでの仲間である林先生と共に、本学の英語学研究教授陣のまさに双壁となって、大学院や学部の学生を御指導になり、有為の人材を多数送り出された。学界に又実務の世界に対して先生のなされた貢献はまことに大きいと言わなければならない。

われわれの集まる和やかな席上、先生が笑いながら、二度言われたことがある。それは、本学へ教授として来るにあたって、当時助教授であった大井浩二（現在、関西学院大学文学部教授）、田川弘雄（本学教授）それに私の三人との人間関係を気遣っていたが、実際にわれわれ三人と会ってみて、これなら大丈夫だと思った、というのである。林先生と共に、早くから「英語学ライブ

ラリー」などで斯界に名高い森塚先生に来て頂くのに、こんなご心配をおかけしていたことが、私などには申し訳けないやら恐れ多いやらに思えたものである。ともあれ、かように先生は、われわれ若い者に細かい配慮といったわりを下さったお方だが、又先生の屈託のない明るく積極的な御気性、穏やかでやさしく、かつ誠実、公平なお人柄が、知らず知らずのうちにわれわれや教えを受ける学生の敬愛の的となっていたことは間違いない。

森塚先生の学界に対する御貢献については先にちょっと触れたが、戦後の早い時期にフルブライト留学生として渡米、M. A.の学位を取得されて帰国、その後も日本の英語学に新風を吹き込む目ざましい活躍をされたと承知している。戦後の英語学の流れの中で、先生は数少ない指導者の一人であり、われわれがこの十六年間、日常親しく接することができたのはまことに幸いであったと言わねばならないであろう。

学科主任としてのこの三年間、学生の就職、進学の話、悩む学生の相談相手、われわれスタッフの間のとりまとめなどをほとんどひとりでお引き受け頂く格好になってしまった。申し訳けない限りである。林先生のあとを承けて英語学科を率いて下さった御苦労に対し、われわれは満腔の感謝と敬意をこめてこの記念の特集を捧げたいと思う。

森塚先生の去られたあとの英語学科には、昭和生まれの者ばかりが残ることになる。先生の遺されたものを受け継いで、覚悟もあらたにわれわれは、それぞれの道で精進することになるであろう。

御病気で休まれることの減多になかった先生には、ますますお達者で今後も御活躍されるよう、又折りにふれて御指導、御鞭撻をわれわれに賜わるようお願いして筆を置くこととする。